



有限会社 宮田工務店
代表取締役

宮田 大輔

中学3年生の時、恩師の支えを受けて自分自身の将来に向き合い、
10年ごとにそれぞれの年代で進むべき道を心に決めていたという宮田社長。
20代のころ、社長を襲ったのは信頼するパートナーだった兄の突然の死——。
その悲しみを乗り越え、自分が決めた道をただ真っ直ぐに突き進んできた。
そしてたどり着いた今。「40代は人を育て、強固な信頼関係を築く時」——。
目指すべきゴールはまだ先にある。到達するその日まで、社長は歩みを止めない。

**「前だけを見て進んできたから今がある。
進むべき道がある限り、歩みを止めない」**



お客様と従業員の満足を追求—— その先で、地域に必要とされる会社へ

1980年の創業から40年以上にわたって建設業を手掛け、地域の安心・安全で快適な暮らしを下支えしてきた『宮田工務店』。土木工事や舗装工事をはじめ、塗装工事、大工工事、管工事、林業や建設発生土処分、採石業など守備範囲は広く、しかもそのほとんどを自社で対応している。本日はタレントの松尾伴内氏が2019年に二代目に就任した宮田社長のもとを訪問し、その横顔に迫った。



有限会社
宮田工務店

広島県庄原市東城町小奴可
1279番地

——早速ですが、『宮田工務店』さんの業容からお聞かせ願います。

当社は1980年に会長である私の父が創業した工務店です。土木・建設業全般と林業、建設発生土の処分業、土石の採掘と販売など幅広く手掛けており、ここ広島県庄原市を中心とする地域のまちづくりや災害の復旧に貢献してきました。

——では宮田社長は子どものころから先代の後を継ぐことを意識しておられて？

そうですね。中学3年生の時、会長から私と兄に話がありまして。「会社を継ぐつもりなら守り立てて経営を進めていこうと思う。けれども継がないなら新たに人を雇用せず、徐々に規模を小さくしていく」と。当時高校1年生だった兄は、「先のことは分からない」という返事でした。一方、私は「現場を継ぐ」と答えました。というのも私はよくアルバイト

で家業を手伝っていたのですが、それがとても楽しくて。ただ、父の姿を見ると、資金の管理など難しそうなお仕事もたくさんやっていて、それは自分には無理だと思っていたんです。それでも、勉強が得意な兄ならできるだろうと思い、私は敢えて「会社を継ぐ」のではなく、「現場を継ぐ」と言ったんですよ。

——なるほど。社長としてはお兄様と上手く役割分担をして継いでいこうと考えておられたと。では学業を終えられて、すぐにこちらに入られたのでしょうか。

いいえ。専門学校を卒業してから、一旦同業他社でお世話になり、経営面など様々なことを学ばせていただきました。そうして1年半ほど経ったころに台風によって地元で大きな被害が発生し、父から人手が足りないから戻ってこいと言われて家業に入りました。それが21歳の

時でしたね。

——そこからは現場でお仕事を？

はい。アルバイトの時と何ら変わらず、先輩の従業員さんたちも当たり前のように接してくれて嬉しかったですし、やり甲斐も大きかったですね。ただ、時代の流れで提出書類がデジタルになり、図面も手書きからCADになり、専門的な勉強をしていない私では対応が難しくなってきました。そんな状況を救ってくれたのが、兄でした。当時兄は測量会社に勤めていて、パソコンもCADもできるということで当社に加わってもらったんです。

——お兄様の存在は非常に心強かったことでしょうか。

そうですね。2年ぐらい兄と一緒に仕事をしたのですが、ある時、兄が突然死してしまっただけで、やっていたことは何も変わりません。代替わりしたからといって戸惑うことも負うこともありませんでした。ただ、兄の死が私にとっては大きなターニングポイントになって、仕事のやり方も変わりましたね。

——ほう。と、いますと？

入社以来とにかく忙しくて朝6時半に起きて7～8時から現場に入り、帰宅するのが深夜という毎日でした。さらに兄が亡くなってからは兄が担当していた現場も抱えて多忙を極めました。もう兄に頼ることはできません。パソコンもCADも必死で覚えました。もうやるしかない、という気持ちで実践を重ねるうちに、いつの間にかできるようになっていったんです。



タレント
松尾 伴内

「西日本豪雨の時に、県や市からの依頼を待たずに復旧に着手されたという宮田社長。県や市の方がすぐにOKを出されたのは、長年にわたって地域で蓄積されてきた信用があつてのことでしょう。素晴らしい決断力と行動力です。また、緊急時に従業員さんに指示を出される時も、誰に何を任せたら良いかを把握されているようで、社内での信頼関係の強さも窺えましたね」松尾 伴内・談

——「いつの間にか」とおっしゃいますが、かなり努力されたのでしょうか。私だったら心が折れてしまいそうですよ。

そんなことを考える余裕ありませんでした。やらないといけないことがあり、責任があり、待っていている人がいる。そういった方々にとってこちらの事情は関係ないと思って仕事に集中しました。また、中学校時代の恩師から「つらいことを乗り切れば、人間としての幅が広がる」「道を外れることがあっても、信念に向かっていけば必ず元の道に戻ることができる」という教をいただいています。この言葉があつたからこそ、乗り越えることができたのだと思います。

——金言に背中を押された。代替わりされたのはいつだったのでしょうか。

2019年の11月です。兄が他界した後、30歳ぐらいからは、主に父は現場、私が経営面を担っていたので、肩書きが変わっただけで、やっていることは何も変わりません。代替わりしたからといって戸惑うことも負うこともありませんでした。ただ、以前は経営理念がなかったので、新たに経営理念を掲げました。「地域になくはない会社にする」「お客様に喜んでいただける仕事をする」「ずっと働きたいと皆が思える会社にする」という3点です。

——経営理念を掲げられた狙いとは。

創業以来、経営を行う上でベースとなっていたのは父の考え。けれども、これからの時代は目指すべきゴールを明確にすることが従業員のパフォーマンスを高める上で必要不可欠だと考えたんです。さらに経営理念だけでなく同時に経営計画も立てて、気持ちも新たに再出発



代表取締役
宮田 大輔

しました。

——お話も尽きませんが、最後にこれからの展望をお聞かせ下さい。

中学3年生の時、恩師と一緒に将来やるべきことを決め、それをベースに歩んできました。10代はやりたいことを決めて努力をする。20代は技術を高めるために何でもやる。30代は仕事も覚えて精神的にも安定してくるので、経営者として上に立つ努力をする。そして40代。人を育て、人との強固な信頼関係を築いていく——今はまさにその真っ最中です。これからの50代は育ててきた人に任せて、背中を押すこと。60代では引退し、後進に引き継ぎたいですね。

(2021年10月取材)

Pick up the story

自ら、動く

▼2018年7月に発生した西日本豪雨。「宮田工務店」が拠点を置く広島県内各地では多くの土砂災害が発生し、住宅の倒壊や浸水被害も相次いだ。「当時は雨が降って外にも出られない状態。国道も県道も土砂で通行できませんでした。消防車やパトカーでさえ取り残されて出動できない状況だったんです」と当時を振り返る宮田社長。その中で従業員や取引先などの安否を確認し、県からの災害復旧の指示を待っていたという。しかし、県も把握できないほど被害は甚大で、いつまで待っても連絡は来なかった。「もうこれ以上は待てない」——そう判断した社長は、自ら県に連絡をして復旧工事にとりかかると決意。県に連絡後、県道を開通させ、市に連絡をして市道の復旧にも取り組んだ。「私が悩めば、従業員も不安になる。緊急時は早急に決断をすることが大切。後は動きながら修正すればいいんです」。社長の力強い言葉に、頼もしいリーダーシップを感じると共に、「自ら動くリーダーに人はついていくもの」だということを改めて実感した対談だった。